

**[B年] 待降節第1主日(2023年12月3日)****【旧約聖書日課】 イザヤ書 52章1～10節**

- 1 奮い立て、奮い立て  
力をまとえ、シオンよ。  
輝く衣をまとえ、聖なる都、エルサレムよ。  
無割礼の汚れた者が  
あなたの中に攻め込むことは再び起こらない。
- 2 立ち上がって塵を払え、捕らわれのエルサレム。  
首の縄目を解け、捕らわれの娘シオンよ。
- 3 主はこう言われる。  
「ただ同然で売られたあなたたちは  
銀によらずに買い戻される」と。  
4 主なる神はこう言われる。初め、わたしの民はエジプトに下り、そこに宿った。また、アッシリア人は故なくこの民を擄取した。5そして今、ここで起こっていることは何か、と主は言われる。わたしの民はただ同然で奮い去られ、支配者たちはわめき、わたしの名は常に、そして絶え間なく侮られている、と主は言われる。6それゆえ、わたしの民はわたしの名を知るであろう。それゆえその日には、わたしが神であることを、「見よ、ここにいる」と言う者であることを知るようになる。
- 7 いかにも美しいことか  
山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は。  
彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え  
救いを告げ  
あなたの神は王となられた、と  
シオンに向かって呼ばわる。
- 8 その声に、あなたの見張りは声をあげ  
皆共に、喜び歌う。  
彼らは目の当たりに見る。  
主がシオンに帰られるのを。
- 9 歓声をあげ、共に喜び歌え、エルサレムの廢墟よ。  
主はその民を慰め、エルサレムを贖われた。
- 10 主は聖なる御腕の力を  
国々の民の目にあらわにされた。  
地の果てまで、すべての人が  
わたしたちの神の救いを仰ぐ。

**【使徒書日課】 ローマの信徒への手紙 11章13～24節**

13では、あなたがた異邦人に言います。わたしは異邦人のための使徒であるので、自分の務めを光栄に思いません。14何とかして自分の同胞にねたみを起こさせ、その幾人かでも救いたいのです。15もし彼らの捨てられることが、世界の和解となるならば、彼らが受け入れられることは、死者の中からの命でなくて何でしょう。16麦の

初穂が聖なるものであれば、練り粉全体もそうであり、根が聖なるものであれば、枝もそうです。

17しかし、ある枝が折り取られ、野生のオリーブであるあなたが、その代わりに接ぎ木され、根から豊かな養分を受けようになったからといって、18折り取られた枝に対して誇ってはなりません。誇ったところで、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。19すると、あなたは、「枝が折り取られたのは、わたしが接ぎ木されるためだった」と言うでしょう。20そのとおりです。ユダヤ人は、不信仰のために折り取られましたが、あなたは信仰によって立っています。思い上がってはなりません。むしろ恐れなさい。21神は、自然に生えた枝を容赦されなかったとすれば、恐らくあなたをも容赦されないでしょう。22だから、神の慈しみと厳しさを考えなさい。倒れた者たちに対しては厳しきがあり、神の慈しみにとどまるかぎり、あなたに対しては慈しみがあるのです。もしとどまらないなら、あなたも切り取られるでしょう。23彼らも、不信仰にとどまらないならば、接ぎ木されるでしょう。神は、彼らを再び接ぎ木することがおできになるのです。24もしあなたが、もともと野生であるオリーブの木から切り取られ、元の性質に反して、栽培されているオリーブの木に接ぎ木されたとすれば、まして、元からこのオリーブの木に付いていた枝は、どれほどたやすく元の木に接ぎ木されることでしょうか。

**【福音書日課】 ヨハネによる福音書 7章25～31節**

25さて、エルサレムの人々の中には次のように言う者たちがいた。「これは、人々が殺そうとねらっている者ではないか。26あんなに公然と話しているのに、何も言われない。議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではなからうか。27しかし、わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ。」28すると、神殿の境内で教えていたイエスは、大声で言われた。「あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。29わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである。」30人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである。31しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか」と言った。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## イザヤ書 52章1～10節

- <sup>1</sup> 目覚めよ、目覚めよ  
力をまとえ、シオンよ。  
美しい衣をまとえ、聖なる都エルサレムよ。  
無割礼の汚れた者が  
あなたの中に入ることは二度とない。
- <sup>2</sup> 塵を払い落して立ち上がれ。  
座に着け、エルサレム。  
あなたの首の縄目を振りほどけ、捕囚の娘シオンよ。
- <sup>3</sup> 主はこう言われる。  
あなたがたはただで売られた。  
それゆえ、金を払わずに贖われる。  
‘主なる神はこう言われる。私の民は、初めにエジプトに下り、そこに寄留した。また、アッシリア人がその後、彼らを抑圧した。’<sup>5</sup>今、ここで私は何をしよう——主の仰せ。私の民はただで奪い取られ、民の支配者たちは泣き叫んでいる——主の仰せ。私の名は、日夜、絶えまなく悔られている。<sup>6</sup>それゆえ、私の民は私の名を知るようになる。その日、「私はここにいる」と告げる者、それが私だ。
- <sup>7</sup> なんと美しいことか  
山々の上で良い知らせを伝える者の足は。  
平和を告げ、幸いな良い知らせを伝え  
救いを告げ  
シオンに「あなたの神は王となった」  
と言う者の足は。
- <sup>8</sup> 聞け、あなたの見張りが声を上げ  
共に喜び歌う。  
主がシオンに帰られるのを  
彼らは目の当たりにするからだ。
- <sup>9</sup> 歓声を上げ、共に喜び歌え、エルサレムの廃虚よ。  
主がその民を慰め、エルサレムを贖われたからだ。
- <sup>10</sup> 主はその聖なる腕を  
すべての国民の目の前にあらわにされた。  
地の果てのすべての者が、私たちの神の救いを見る。
- ローマの信徒への手紙 11章13～24節
- <sup>13</sup>そこで、あなたがた異邦人に言います。私は、異邦人への使徒として、自分の務めを光栄に思っています。  
<sup>14</sup>何とかして私の同胞にねたみを起こさせ、その幾人かでも救いたいのです。<sup>15</sup>彼らが捨てられることが世界の和解となるなら、受け入れられることは死者の中からの命でなくて何でしょう。<sup>16</sup>麦の初穂が聖なるものであれば、

ば、パン生地もそうであり、根が聖なるものであれば、枝もそうです。

<sup>17</sup>しかし、ある枝が折り取られ、野生のオリーブであるあなたがそれに接ぎ木され、根から豊かな養分を受けているからとって、<sup>18</sup>あなたは、折り取られた枝に対して誇ってはなりません。誇ったところで、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。<sup>19</sup>すると、あなたは、「枝が折り取られたのは、私が接ぎ木されるためだった」と言うでしょう。<sup>20</sup>そのとおりです。ユダヤ人は、不信仰のために折り取られ、あなたは信仰によって立っています。思い上がってはなりません。むしろ恐れなさい。<sup>21</sup>神が自然に生えた枝を惜しまなかったとすれば、恐らくあなたを惜しむこともないでしょう。<sup>22</sup>だから、神の慈しみと厳しさを考えなさい。厳しさは倒れた者に向けられ、神の慈しみにとどまるかぎり、その慈しみはあなたに向けられるのです。そうでなければ、あなたも切り取られるでしょう。<sup>23</sup>彼らも、不信仰にとどまらないならば、接ぎ木されるでしょう。神は彼らを再び接ぎ木することがおできになるからです。<sup>24</sup>もしあなたが、自然のままの野生のオリーブの木から切り取られ、元の性質に反して、良いオリーブの木に接ぎ木されたとすれば、まして、元からこのオリーブの木に付いていた枝は、どれほどたやすく元の木に接ぎ木されることでしょうか。

## ヨハネによる福音書 7章25～31節

<sup>25</sup>さて、エルサレムの人々の中には次のように言う者がいた。「これは、人々が殺そうと狙っている者ではないか。<sup>26</sup>あんなに公然と話しているのに、何も言われない。議員たちは、この人がメシアだということを、まさか本当に認めたのではなからうか。<sup>27</sup>しかし、私たちは、この人がどこの出身かを知っている。だが、メシアが来られるときは、それが、どこからか知っている者は一人もいない。」<sup>28</sup>イエスは神殿の境内で教えながら、大声で言われた。「あなたがたは私を知っており、どこの出身かも知っている。私は勝手に来たのではない。私をお遣わしになった方は真実であるが、あなたがたはその方を知らない。<sup>29</sup>私はその方を知っている。私はその方のもとから来た者であり、その方が私をお遣わしになったのである。」<sup>30</sup>人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかけることができなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである。<sup>31</sup>しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか」と言った。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・12月3日「待降節第1主日」の日課主題は「主の来臨の希望」。伝統的な教会暦は、「待降節」から新しい一年一巡りが始まるものとされている。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、主なる神が王として来臨されることを告げる預言の箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、パウロが「異邦人の使徒」として異邦人の救いが起こる機序をオリーブの木のとえで語る箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、仮庵祭の最中に敵対する者たちのいる中で主イエスがご自身の何者であるかを人々に告げられた箇所。

**旧約日課(イザヤ 52 章より)**

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言書。前8世紀末に南王国の宮廷預言者として活動した祭司イザヤに帰された預言書として編纂されているが、通例、直接イザヤに帰されるのは前半39章までと解され、40章以下(通例では「第二イザヤ」と呼ぶ)は、前6世紀のバビロン捕囚期以降に預言者イザヤの伝統を継承する意図を持った祭司・預言者集団によって告げられた預言集と考えられている。歴史上の祭司イザヤは、前8世紀後半、北王国がアッシリアに滅ぼされていく時代に南王国の四代の王の下で宮廷預言者として活動したが、「イザヤ書」中では、アハズ王時代の逸話(7章)とヒゼキヤ王時代の逸話(36~39章)が伝えられている。後者の逸話は、「列王記」下18~20章とほぼ一致しており、「イザヤ書」編纂者と「列王記」編纂者が同じ集団に属していたこと(あるいは同一であったこと)を示している。「列王記」を含む正典「前の預言者」と「イザヤ書」を含む正典「後の預言者」は、バビロン捕囚期以後のペルシア支配の時代に正典として成立したと考えられ、一連の正典編纂事業に「イザヤ」的伝統を継承しようとした集団が大きな役割を果たしたことがうかがえる。日課箇所を含む「第二イザヤ」が、明らかに歴史的イザヤとは時代錯誤な預言句を含みながら「イザヤ書」の中に含まれたのは、このような正典全体の編纂で中心的役割を果たした者たちの手によることだったからであろう。

・日課箇所は、終末的預言として告げられる「エルサレム・シオン」の回復預言で、主なる神が「王」として直接統治をされる方として来臨される、と告げられる。「第二イザヤ」の預言は、捕囚後のペルシア支配時代に告げられたものであり、オリエント世界で初めてほぼ全域を統治するに至ったペルシア王キュロスを「主が油を注がれた人」(45:1)すなわち「メシア」と呼ぶ状況下で編纂されている。南王国ユダ王宮の末裔を中心とした者たちによって着手された「ユダヤ共同体」の再建事業は、当然、世俗の「王権」を主張しない「宗教共同体」として構想された。この構想に至る過程で

は、「ユダ・イスラエルの神」として知られていた神を、民族的守護神に留まらない「全世界・全民族の神」として認識される唯一絶対の存在とする神観の進展が生じたと考えられる。それは、ペルシア帝国という絶対的統一国家の存在を認めた上で自己の生き残りを図った「ユダヤ共同体」とっては、必然の神学的帰結であったと考えられる。このような普遍主義的な神観はその後のユダヤ教の主要な一角を形成したが、他方でペルシア支配時代以後のヘレニズム時代(ギリシア人による支配の時代)には、政治・宗教におけるギリシア化の圧力が強まる中で「ユダヤ共同体」の民族的アイデンティティを強調する民族主義的(ダビデ王朝復古主義的?)な神観が台頭するようになったと考えられる。そのような傾向の文書は、正典中の「諸書」に多く含まれる。

・「シオン」は、エルサレムの町が建つ丘の呼び名で、「エルサレム」の別称として用いられている。後の時代に台頭してくる民族主義的な立場の者たちの中には、ここに告げられる「エルサレム・シオン」の再興預言を、民族国家「イスラエル」再建の大義とみなす者もある。しかし、ここで告げられているのは世俗的な「王権」の復興ではなく、「主なる神を王とする」という宗教至上主義に基づく共同体の再興であり、それゆえにこの預言は、56章に至って、ユダヤ民族を超えた(民族主義を否定した!)異邦人を含む普遍的な「信仰共同体」の実現という預言にまで展開している。

**使徒書日課(ローマ 11 章)**

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。本書簡の執筆背景などは、過去の「聖書と祈り」の資料(231105, 231112 など)を参照。

・日課箇所、パウロは自ら「異邦人のための使徒」と称している。とは言え、パウロはもっぱら異邦人のみを宣教対象として活動していたわけではない。おそらくは、各地のユダヤ会堂に「神を畏れる者」として出入りしていた未改宗の異邦人求道者を対象として、彼らが「割礼」を受けたり「律法」遵守の誓約をせずとも、ただ「洗礼」によって「救いの共同体」に迎え入れ得ることを強く主張することで、他の使徒たちと一線を画していたのだろう。使徒たちの宣教活動は、もっぱら各地のユダヤ人や改宗者(元異邦人のユダヤ教徒)に向けられたものであり、未改宗異邦人に対して積極的に働きかけることは後回しになっていたと考えられるのである。

・「オリーブの木」を用いたたとえは、パウロが、異邦人宣教を観念的に実践していたわけではなく、歴史的なユダヤ人社会の中で構想されてきた「救いの共同体」に根差して、そこに「接ぎ木」されることとして理解していたことを示している。つまり、パウロは、「キリスト教」を発明したわけではなく、あくまで従来の「ユダヤ教」の新しい展開(拡大!)を構想しているのである。

**福音書日課(ヨハネ7章より)**

・日課箇所は、「仮庵祭」の設定がされた場面(7~10章)の中、すでに敵対するグループから命を狙われていたという主イエスが、なお祭りの最中に人々の中で宣教活動をされていた、という状況における人々の反応と主イエスの主張を伝えている。「仮庵祭(スコット)」は、直前に祝われる「新年祭(ローシュ・ハシヤナ)」と「贖罪日(ヨム・キプル)」に続いて祝われる、三大祭の中でも祝祭感に満ちた祭りとされる。そのような場面設定の中で、敢えて主イエスを巡る不穏な動きがあったことを描くことによって、「ヨハネ福音書」は、当時実践されていた祭りの欺瞞性を暴き、主イエスによって伝統的な「祭り」が再定義されるということを示そうとしているのだろう。7:37 以下で描かれる主イエスの「生きた水の流れ」についての宣言は、当時「仮庵祭」に際してエルサレムで実施されていた神殿祭壇に水を灌ぐ儀式(ベート・ハシヨエヴァ)」に代わるものとしてご自身を提示した言説と解される。

・日課箇所で議論となっているのは、「メシア」の出自についてである。人々は、「メシアは出自を知られない」と主張しているが、主イエスは、「(神から)遣わされた者」としての本質をこそ(メシアかどうかの)判断の主眼に置くべきだと主張されている。これは、本福音書が一貫して強調する主イエスの本質である。

**来週の誕生日 (12月3日~9日)****主日礼拝の讚美歌から**

- ・21-242 番「主を待ち望むアドヴェント」は、20世紀オーストリアの女性教師フェルシュルの作詞。さまざまな曲で歌われてきたが、ドイツのカトリック音楽教師ロールの旋律でよく知られるようになった。
- ・21-230 番「起きよと呼ぶ声」(= I 174)は、16世紀後半ドイツの神学者ニコライの作詞作曲。「コラールの王」と称される讚美歌。この讚美歌に基づいて、バツハ(カンタータ 140 番)らが作曲している。
- ・21-72 番「まごころもて」(= I 202)は、中世の神学者トマス・アキナスの作とされるラテン語聖歌。
- ・21-235 番「久しく待ちにし」は、18世紀英国教会史司祭でメソジスト運動の創始者となったジョン・ウェスレーの弟チャールズ・ウェスレーの作詞で、英語圏では最も広く歌われているアドヴェント讚美歌の一つ。この歌詞に組み合わされた曲は複数あるが、収録曲は、19世紀英国の教会音楽家ゴントレットの作曲したもの。

**21-242 番「主を待ち望むアドヴェント」****Wir sagen euch an den lieben Advent**

1. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die erste Kerze brennt! / Wir sagen euch an eine heilige Zeit, / Machet dem Herrn den Weg bereit!
- ]: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:]

2. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die zweite Kerze brennt! / So nehmet euch eins um das andere an, / Wie euch der Herr an uns getan.
3. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die dritte Kerze brennt! / Nun trag eurer Güte hellen Schein / Weit in die dunkle Welt hinein.
4. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die vierte Kerze brennt. / Gott selber wird kommen. Er zögert nicht. / Auf, auf ihr Herzen und werdet licht!

**21-230 『『起きよ』と呼ぶ声』****Wachet auf, ruft uns die Stimme**

1. Wachet auf / ruft uns die Stimme / Der Wächter sehr hoch auff der Zinnen, / Wach auff du Statt Jerusalem. / Mitternacht heißt diese Stunde / Sie ruffen uns mit hellem Munde: / Wo seydt ihr klugen Jungfrauen? / Wohlauff / der Bräutigam kompt / Steht auff / die Lampen nimpt / Halleluia! / Macht euch bereit / Zu der Hochzeit / Ihr müsset ihm entgegengehn.
2. Zion hört die Wächter singen / Das Herz thut ihr vor Frewden springen, / Sie wachet und steht eilend auff: / Ihr Freund kompt vom Himmel prächtig, / Von Gnaden starck, von Wahrheit mächtig: / Ihr Liecht wirdt hell, ihr Stern geht auff. / Nu komm du werthe Kron / Herr Jesu, Gottes Sohn / Hosianna. / Wir folgen all zum Frewden Saal / Und halten mit das Abendmal.
3. Gloria sey dir gesungen / Mit Menschen und Englischen Zungen / Mit Harpfen und mit Cymbaln schön: / Von zwölf Perlen sind die Pforten / An deiner Statt / wir sind Consorten / Der Engeln hoch umb deinen Thron / Kein Aug hat je gespürt / Kein Ohr hat mehr gehört / Solche Frewde. / Deß sind wir fro / jo / jo / Ewig in dulci iubilo.

**21-72 「まごころもて」****Adore devote****English translation**

1. Godhead here in hiding, whom I do adore, / Masked by these bare shadows, shape and nothing more, / See, Lord, at your service low lies here a heart / Lost, all lost in wonder at the God you are.
2. Seeing, touching, tasting are in thee deceived: / How says trusty hearing? that shall be believed; / What God's Son has told me, take for truth I do; / Truth Himself speaks truly or there's nothing true.
3. On the cross your godhead made no sign to men, / Here your very manhood steals from human ken: / Both are my confession, both are my belief, / And I pray the prayer of the dying thief.
4. I am not like Thomas, wounds I cannot see, / But can plainly call you Lord and God as he; / Let me to a deeper faith daily nearer move, / Daily make me harder hope and dearer love.
5. You are our reminder of Christ crucified, / Living Bread, the life of us for whom he died, / Lend this life to me then: feed and feast my mind / With your sweetness that we all were meant to find.
6. Bring the tender tale true of the Pelican; / Bathe me, Jesu Lord, in what your bosom ran / Blood whereof a single drop has power to win / All the world forgiveness of its world of sin.
7. Jesu, whom I look at shrouded here below, / I beseech you send me what I thirst for so, / Some day to gaze on you face to face in light / And be blest for ever with your glory's sight. Amen.

**21-235 「久しく待ちにし」****Come, Thou Long-expected Jesus**

1. Come, thou long-expected Jesus, / born to set thy people free; / from our fears and sins release us; / let us find our rest in thee.
2. Israel's strength and consolation, / hope of all the earth thou art; / dear desire of every nation, / joy of every longing heart.
3. Born thy people to deliver, / born a child and yet a king, / born to reign in us forever, / now thy gracious kingdom bring.
4. By thine own eternal Spirit / rule in all our hearts alone; / by thine all-sufficient merit / raise us to thy glorious throne.